

# 美という名のエネルギー

vol.12

栗原直弘

## 最終回

### 美術品の流通と価値観

皆様のお陰をもちまして、今回が「美という名のエネルギー」の最終回となります。私  
が今回の連載をお引き受けした理由は、一重  
に現在の美術品や古美術に対する評価や流  
通の在り方に疑問を持ち、また、これからの  
美術品や古美術に対する価値観と美術業界  
の在り方に不安を覚えたからなのです。  
今年の一月から書き続けてきたように、戦後

の美術品や古美術の価格や流通は右肩上が  
りの経済を反映し、市場や業界が膨張する  
とともに、商売になるものをすべて「お宝」  
にしてしまいました。そして、金銭的な評価  
や価値ばかりに目を奪われ、「美」そのもの  
の評価や価値を置き去りにしてきたのではな  
いでしょうか。

そもそも、私が「美のエネルギー理論」を  
構築してきたのは、既存の数寄者やコレク  
ターの高齢化に伴い、美術品や古美術を所  
有する本来の意味である「過去の人々の英  
知を未来へ繋ぐ」という意識が薄れてきてい



ることに危機感を覚えたからなのです。そして、今の若い人達に「美」を理解してもらおうためには、今までのような「見れば解る」「美しいものは美しい」などといった「俺がルールブックだ」的な対応では通用しないと考えたのです。

一段と趣味や価値観が多様化する現代社会の中で、私達美術商がどのようにして今の若い人達に美術品や古美術に興味を持ってもらい、「美」を未来に繋いで行くかを考えた時、私は理論的な「美」の説明が必要であると考え、この「美のエネルギー理論」を発表したのです。

### 朝香宮邸のペンギン

リーマンショック後の不景気で、価値のある無しに関わらず、一部の美術品や古美

術の価格が下がっているのは皆様もご存じでしょう。今年の八月、ある店に古いロイヤル・コペンハーゲンの陶製のペンギンが飾られていました。それは三羽のペンギンが連なるリズムミカルな置物で、私はその瞬間に真葛香山の作品をイメージしました。

それは、日本の明治工芸に影響を受け、ヨーロッパのアールヌーボーからアールデコへの移行期に造られた釉下彩の名品でした。

値段が安かったこともあって即決で購入したのですが、そのペンギンには日本で作られた古い樅の木箱が付属しており、蓋の表に「デンマーク國製陶器 三羽揃へリカ  
ン 壱基」と箱書きがあり、蓋裏には「大正十四年十二月 両殿下御帰朝ノ節御持帰品（旧漢字）」とありました。

旧皇族の旧蔵品であることは、間違いな



いとしても、ペンギンの置物を「ペリカン」などと書いており、またその時点では半信半疑ながら、大正十四年に外遊していた殿下とは誰かを調べ始めた時、友人の歴史学者で、現在映画化されて上映中のベストセラー『武士の家計簿』の原作者・磯田道史氏が店に顔を出します。磯田氏が調べた結果、それは現在「アールデコの館」と呼ばれる、東京都庭園美術館「旧朝香宮邸」旧蔵であることが解ります。この号が読者の皆様のお手元に届く頃には、特別展「朝香宮のグランドツアー」が開かれており、来年の一月十六日(日)まで、このペンギンをご覧ください。たぐいごとができます。

私は、戦後の拝金主義的な物質文明と階級闘争により、日本人は品格ばかりか審美眼すら無くしたと考えるいます。現実

のような価値のある美術品ですら、市場の相場やインターネット価格などの金銭的価値に翻弄されて、ややもすると二束三文で取引されることがあるのです。そして、時として金額の安価な美術品はぞんざいに扱われ、その価値を認められないまま埋没、破損してしまふことすらあるということです。

### 「美」を繋ぐ意味

確かに、高級な外車や腕時計なども、それらの制作によって技術を残そうとするノーブル・オブリーションという意識に裏打ちされています。しかし、茶道具に代表される美術品や古美術を所有するためには、さまざまな知識や経験を必要とし、むしろ、そのような知性を自らの物とするための所有と言っても過言ではないでしょう。



かつての数寄者や財界人が何故「美」に大金を投じてきたか。たとえ、その出発点が私利私欲であったとしても、いずれ死んで持っていけない「美」を、自らが人として今生に生を受けた喜びとともに「美」を愛で、歴史に存在した証として次の世代に「美」を繋ぐという社会貢献なのです。このように「美」というものが、「先達たちからのバトン」であることを理解すれば、今の私達が何をすべきか、という答えは自づから出るのではないでしょうか。

「天地開闢」以来の不況の中で、もはや美術品や古美術などとは無用の長物と思われる方もいるかもしれません。しかし、まだ弊社のお客様の中には「先行き、バカ息子が売っても仕方がない、少なくとも私が生きていくうちは未来に繋ごう」とおっしゃ

る方がおられます。そして、過去にもそのような方々がおられたからこそ、今私達は多くの美術品や古美術を目にすることができるのである。

良くも悪くも「美」に執着し、「美」を求めると言う行為は、動物にはない意識であり、それは人が人である証でもあります。これは買う側、売る側を問わず、今私達に求められているのは、目先の物欲や欲得、時代によって翻弄される価値観から離れ、未来に繋ぐべき価値ある「美」を見極めるための知性を養い、自らの使命として「美」を繋いで行く覚悟を持つことが必要ではないでしょうか。私は自らの生業を通して、この国の文化と言語だけは守り伝えたいと希望しているのです。